様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：２２７０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2017
課題番号：２６８６１９８８

研究課題名（和文）児童虐待予防を目指した個別支援ツールの標準化と評価：ネグレクトに焦点をあてて

研究課題名（英文）Standardization and evaluation of case management tools for child abuse prevention: Focused on child neglect

研究代表者
有本　梓（ARIMOTO, Azusa）

横浜市立大学・医学部・准教授

研究者番号：９０４５１７６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、児童虐待予防に向けて、ネグレクトの予防に焦点をあてた保健師の個別支援ツールを標準化することを目的とした。市町村に勤務する保健師を対象とする全国調査を実施した。保健師が乳児ネグレクトのサインを早期に発見し予防に活用可能な乳児ネグレクトサインアセスメント尺度を開発し、妥当性・信頼性を検討した。尺度は一定の妥当性・信頼性を有することが確認された。さらに、ネグレクトサインの関連要因が明らかとなった。尺度の活用可能性および予測妥当性の検証が課題である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to standardize an assessment tool for case management by Public Health Nurses (PHNs), focused on preventing child neglect and to contribute to child abuse prevention. We conducted a national survey of PHNs who worked at a municipality. We developed and tested the reliability and the validity of Infant Neglect Sign Assessment Scale, a professional-assessment questionnaire that can be used by public health nurses to assess early signs of infant neglect to prevent child neglect among infants and their caregivers. This scale demonstrated adequate reliability and validity. We also showed related factors to infant neglect sign. Further research is needed to explore predictivity of this scale and to increase the possibility of generalizability.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：児童虐待　ネグレクト　個別支援　ケアマネジメント　尺度開発　アセスメント　公衆衛生看護　保健師

１．研究開始当初の背景

(1) 背景

児童虐待の様相は、個々の家族で多様なため、虐待発生予防には、親・子ども・家族に見合った個別支援が不可欠である。個別支援とは、家庭訪問や面接・電話等の多様な方法を用いて、親・子ども・家族の多様な健康問題・家族問題・生活問題を特定し、リスクの高い家族に対して、問題に応じた対応と地域のサービス調整を行う支援である[1)]。

ネグレクトは個別支援が特に重要な虐待の種類である。家族の多様な問題に個別支援により対応できれば、ネグレクトの発生と子どもへの悪影響を予防できる可能性がある。ネグレクトとは「児童の心身の正常な発達を妨げるような著しい減食又は長時間の放置、保護者以外の同居人による虐待行為の放置、その他の保護者としての監護を著しく怠ること」であり[2)]、親の経済的困難、社会的孤立、被虐待歴、身体・精神疾患等の要因が重複して生じる[3) 4)]。他の種類の虐待と比べ状況を明らかにしにくく、長期間で進行し、個別性が高い[3)]。さらには、子どもの発育発達の遅れや不衛生による体調悪化を起こし、乳幼児では生命の危機を及ぼす。

日本では、自治体保健師が、以前から健康診査等の母子保健事業を通じて多様な問題を抱える家族を発見し、最初の支援者として、継続的な個別支援を行ってきた。保健師はネグレクトのリスクの高い家族を早期から把握し個々の家族の生活実態に即して支援できる立場にある。実際に、自治体保健師の支援事例では、児童相談所に比べ、ネグレクトと 3 歳未満の乳幼児の割合が高かった[5)]。また、個別支援は難しく、保健師は、虐待予防事例への個別支援に関する研修と知識・技術を求めていた[6)]。しかし、根拠に基づいた個別支援ガイドラインは見られず、多様な虐待事例への個別支援は保健師個人の経験や力量にまかされてきた。

(2)研究の学術的背景

文献レビューによると、保健師の個別支援は、①母子保健事業を通じた早期からの予防的な支援、②家庭訪問による個々の家族の生活実態と問題の把握、③家族との信頼関係の構築・維持による長期的支援が特長であり、これらの個別支援は、ネグレクトのリスクが高い事例への支援で特によく行われていた[7)]。海外では、ネグレクトの原因探索やアセスメントツールの開発は行われてきた[3)]が、支援方法に関する研究は少なく、ネグレクトに関する保健師による個別支援に関する研究は再発予防に向けた家庭訪問の介入[8)]に限られている。児童虐待予防を目指した保健師による個別支援に関しては、海外では、地域看護学、小児科学、公衆衛生学領域で、妊娠期からの継続的な家庭訪問に関する研究が見られる[9)]。日本では、保健師による家庭訪問[10)]、研究代表者が行ったネグレクトのリスクのある家庭に対する個別支援[7)]に関する質的研究に限られている。

ネグレクトについては、海外では、社会福祉学・小児科学分野でアセスメントや支援方法に関する研究が散見され、ネグレクトの分類や影響に関する研究も増えつつあるが、少数である[1)4)8)]。介入方法については、再発予防を目指した介入研究[7)]のみである。日本では、社会福祉学分野でのネグレクト発生後の進行予防を目指した個別支援に関する事例報告に限られており、研究代表者により初めて保健師による個別支援に関する質的研究[8)]が示された。さらに、研究代表者は平成 23-25 年度科研費若手研究(B)において、保健師を中心とした多職種チームによる虐待の予防を目指した個別支援技術を抽出し、ネグレクトの予防と発見に焦点をあてた保健師の個別支援ツール案を開発した。課題は、個別支援ツールを標準化し活用可能性を高めるため、保護者の視点を取り入れ、保護者とともに多様な健康問題・家族問題・生活問題を見直すリスクアセスメントシート等のツールを開発し、普及啓発することである。

すなわち、児童虐待の発生予防を目指した保健師による個別支援ツールを標準化し、活用可能性を検討する必要がある。

２．研究の目的

本研究は、保健師の効果的な児童虐待の発生予防活動とその評価を可能とするため、ネグレクトの予防と発見に焦点をあてた保健師の個別支援ツールを標準化することを目的とした。特に、早期支援が特に必要であり保健師が接点を持つ機会が多い、乳児とその家族への乳児ネグレクトの予防と発見のためのアセスメント尺度開発を行った。

３．研究の方法

(1) ネグレクトの予防と発見に焦点をあてた個別支援ツール改良版の作成

ネグレクトの予防と発見に焦点をあてた個別支援ツール改良版の作成、個別支援プロセス尺度案の開発、事例検討会の試行を行った。保健師に対するフォーカスグループインタビューおよび文献レビューから作成したツール案を基に、国内外の文献レビューを加え、研究者・学識経験者・実践者との意見交換を行い、個別支援ツール改良版を作成した。さらに、インタビューおよび文献レビューから作成した項目案に、文献レビューおよび研究者・多職種実践者からの意見聴取の結果をふまえ、個別支援ツール改良版の項目追加、表現の洗練を行った。

(2) ネグレクトの予防と発見に焦点をあてた予防と発見のためのアセスメント尺度開発と評価

ネグレクトに焦点をあてたアセスメント項目に関する研究は、国内外ともに，予防段階で乳児期など早期に専門家がアセスメン

ト可能な尺度はみあたらなかった。そこで、早期支援が特に必要であり保健師が接点を持つ機会が多い乳児期に着目して「ネグレクトサインアセスメント尺度(乳児版)」を開発した。

26－27 年度に作成した項目案に、インタビューデータ分析、文献レビュー、研究者からの意見を加えて、項目追加、表現修正を行い、暫定版を作成した。

尺度の信頼性・妥当性の検討に関する調査として、無記名自記式質問紙調査（郵送法）を実施した。対象は全国市区町村の母子保健担当部署に勤務する常勤保健師のうち、ネグレクトが疑われる乳児とその家族の個別支援経験がある保健師とした。質問紙を市区町村単位に郵送し、対象者による個別返送により回収した。

尺度の妥当性・信頼性検証、乳児ネグレクトサインの関連要因の検討を行った。

さらに、二次分析を行い、行政保健師における児童虐待事例への支援に対する困難感の類型と特徴を明らかにした。

分析は SPSS および Amos version 22.0 を使用した。倫理的配慮として、所属大学倫理審査委員会の承認を受けて実施した.（A141127021）

４．研究成果

1) ネグレクトの予防と発見に焦点をあてた個別支援ツール改良版の作成

研究者・学識経験者・実践者との意見交換により、個別支援ツールに国内・海外の知見および国内で保健師が実施してきた個別支援の実態を加味した。

さらに、他の虐待と重複している場合の対応、対象児および使用場面の具体化および焦点化を図った。個別支援プロセス尺度案を作成した。また、保健師への研修方法として文献レビューから最も効果的とされた事例検討会を試行した。

以上より、個別支援ツールの活用可能性の検証およびプロセス評価に向けて個別支援ツール案を洗練できた。

2) ネグレクトの予防と発見に焦点をあてた予防と発見のためのアセスメント尺度開発と評価

尺度の妥当性・信頼性を検討した結果、尺度暫定版の重要性と一事例に対する評価を基に，項目分析，探索的・確証的因子分析により、「乳児ネグレクトサインアセスメント尺度」が示された。確証的因子分析の結果，十分なモデル適合度を示した．また、信頼性を示した。本尺度は，予防段階におけるネグレクトサインアセスメント尺度として一定の信頼性と妥当性を有する可能性が示唆された.

乳児ネグレクトサイン尺度を用いて、乳児ネグレクトサインとの関連要因を検討した関連要因が明らかとなった。

さらに、二次分析の結果、行政保健師における児童虐待事例への支援に対する困難感の類型と特徴を明らかにした。困難感を感じる理由について自由記述に回答した者を分析対象者とした。94.4%が困難感を感じており、人口規模１万人未満の自治体の保健師に比べ、10 万人以上の自治体の保健師では困難感をよく感じる割合が有意に高かった。困難感の理由は、介入方法の難しさ、健康問題と生活課題の重複、関係機関連携の難しさ、養育者が支援に拒否的、支援体制や社会資源の少なさであった。人口規模 10 万人以上の自治体での困難感軽減に向けた取り組み、共通内容の研修プログラムの開発および支援体制整備の必要性が示唆された。

３）本研究の意義および課題

本研究の成果の意義は、以下の 3 点である。第一に、国内外での動向や知見と実際の保健師の支援状況をふまえて個別支援ツールを洗練でき、特に、国内外で初めて、予防段階におけるネグレクトの徴候（サイン）を評価するネグレクトサインアセスメント尺度を開発し、一定の妥当性・信頼性を有する尺度が開発できた点である。

第二に、ネグレクトサインの関連要因から予防的支援に向けた視点を明らかとなり、保健分野におけるネグレクトの予防的支援に向けた視点として活用できることが示唆された．ネグレクトサインアセスメント尺度（乳児版）の妥当性・信頼性検証のための全国調査は、母子保健分野におけるネグレクト疑い事例に関する初の全国調査であり、実態把握の点でも意義がある。

第三に、母子保健分野の保健師を対象とした全国調査により、行政保健師の児童虐待事例への困難感の理由と特徴を初めて明らかにできた点である。

これらは保健分野におけるネグレクトの予防的支援に向けて大きな意義がある。個別支援に活用でき、虐待予防と早期発見に資する可能性がある。特に、乳児ネグレクトサインアセスメント尺度は、母子保健分野の各種事業における保健師によるアセスメントおよびモニタリングへの活用が想定できる.

今後は，乳児ネグレクトサインアセスメント尺度を母子保健分野においてさらに多くの事例を対象に使用し，活用可能性および予測妥当性を検証することが課題である.

＜引用文献＞

1)Crosson-Tower C. (2008). Understanding Child Abuse and Neglect　Seventh Edition. Pearson Education Inc, Boston.
2) 児童虐待の防止等に関する法律
3) Stevenson O. (2007). Neglected children and their families 2nd Edition. Blackwell Publishing, Ltd. Oxford. 43-70.
4)Barron CE, Jenny C. (2011). Definition and categorization of child neglect. In

“Child abuse and neglect: Diagnosis, treatment, and evidence”. 539-543. Elsevier, Inc.
5) 有本梓.(2007).児童虐待に対する保健師活動に関する文献レビュー．日本地域看護学会誌，9，37-45.
6) 中板育美，牧野忍,他(2005).児童虐待予防活動における保健師の自己評価と課題.子どもの虐待とネグレクト,7,24-30.
7) 有本梓,岩崎りほ,他(2013).ネグレクトのリスクを持つ家庭に対する保健師による個別支援の方法．横浜看護学雑誌.6(1): 15-22
8) Chaffin M, Hecht D, et al. (2012) A statewide Trial of the SafeCare Home-based Services Model With Parents in Child Protective Services. Pediatrics, 129(3), 509-515.
9) MacMillan, HL, Wathen CN, et al. (2009). Interventions to prevent child maltreatment and associated impairment. The Lancet 373(9659): 250-266.
10) Ueno M, Kayama M,et al.(2004).How public health nurses understand mothers of abused and neglected children The perception of 'Shindosa' in mothers. Japan Journal of Nursing Science, 1, 117-124.

５．主な発表論文等（研究代表には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 有本梓，田髙悦子.行政保健師における児童虐待事例への支援に対する困難感の類型と特徴，査読有、横浜看護学雑誌. 11(1),19-27,2018
DOI:10.15015/00001276

② 有本梓，田髙悦子，田口(袴田)理恵，臺有桂，今松友紀．都市在住幼児におけるセーフコミュニティ推進に向けた基礎的研究－傷害不安とリスク要因の検討－，査読有,保健師ジャーナル．73(10)：846-853，2017.

③ 有本梓、岩崎りほ、村嶋幸代、田髙悦子．1歳6か月児の母親における保健センターへの相談の希望と経験に関する要因の検討．査読有,横浜看護学雑誌 8(1): 1-8，2015.

④ 有本梓、田髙悦子．児童虐待に対する保健師による活動内容と課題に関する文献検討．査読有，日本地域看護学会誌 17(2)：45－54，2014.

〔学会発表〕（計 11 件）

① 有本梓，田髙悦子：乳児ネグレストサインの関連要因－乳児ネグレストサインアセスメント尺度による検討－，第6回日本公衆衛生看護学会学術集会，2018.1.6～2018.1.7，大阪府大阪市

② 有本梓，田髙悦子．市町村母子保健担当保健師が支援したネグレクトが疑われる乳児事例におけるネグレクトサイン．日本子どもの虐待防止学会ちば大会，2017.12.2，千葉県千葉市

③ 有本梓，田髙悦子：母子保健分野におけるネグレクトサインアセスメ ント尺度（乳児版）の開発，第 76 回日本公衆衛生学会総会，2017.10.31～2017.11.2，鹿児島県鹿児島市

④ 有本梓，田髙悦子：市町村母子保健担当保健師が支援するネグレスト事例の特徴,日本地域看護学会第20回学術集会，2017.8.5～2017.8.6，大分県別府市

⑤ 有本梓，田髙悦子：乳児を育てる家庭における保健師によるネグレクトアセスメントの視点，第 75 回日本公衆衛生学会学術集会，大阪，2016.10.26～2016.10.28，大阪府大阪市

⑥ Arimoto A, Tadaka E: Assessment points of public nurses for finding and supporting families with infants at high risk for child neglect in Japan, The 3rd KOREA-JAPAN Joint Conference on Community Health Nursing, Busan, Korea. 1-3 July 2016

⑦ 岩崎りほ，有本梓，蔭山正子，永田智子：児童虐待予防における市区町村保健師の専門的な役割－保健師と関係者へのインタビューによる分析－，第 74 回日本公衆衛生学会総会，長崎，2015.11.

⑧ 有本梓，田髙悦子：多職種連携を要する児童虐待予防事例に対する個別支援プロセス尺度案の開発－行政保健師の立場から－，第 21 回日本子どもの虐待防止学会にいがた大会，新潟，2015.11

⑨ 有本梓、田髙悦子：児童虐待予防を目指した保健師向け個別支援指針の開発：ネグレクトに焦点をあてて，第 73 回日本公衆衛生学会総会，栃木，2014.11.6

⑩ Arimoto A, Tadaka E, Sato M: Reliability and validity of the Japanese version of the UCLA Loneliness Scale Version 3 among mothers with infants aged four months or 18 months, 6th ICCHNR Community Nursing Research Conference, Seoul,

Korea. 19-21 August 2015

⑪ 有本梓、田髙悦子：児童虐待発生予防を目指した保健師の個別支援ツールの開発：ネグレクトに焦点をあてたアセスメント項目，第 17 回日本地域看護学会学術集会，岡山，2014.8.2

〔図書〕（計　1　件）

1) 有本梓：第 7 章　地域保健. A　母子保健. 神馬征峰、他編集. 系統看護学講座　専門基礎分野　健康支援と社会保障制度[2]公衆衛生. 医学書院、2015.1.

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）
○取得状況（計　0　件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
有本　梓　（ARIMOTO, Azusa）
横浜市立大学・医学部・准教授
研究者番号：９０４５１７６５

(2)研究分担者　なし

(3)連携研究者　なし

(4)研究協力者
田髙悦子　（TADAKA, Etsuko）
岩﨑りほ　（IWASAKI, Riho）